

©Hepburn, A. Barton: Artificial Waterways of the World, New York 1914. ¥ 2.50

陸上交通運輸の機關は、益々發達して、地上に地下に軌道は網狀を呈し、河流交通の船舶も、其數々噸數は驚くべき増進を示し、水陸交通運輸の機關は、愈々完備の域に進まんとせり。されば、運河の如きは、一見陸上交通機關の發達せざりし時代の遺物にして、陸上機關の進歩は、運河の利を奪ひ、而も遂に之に超越せるかの觀なきにあらざるべきも、然も實際は全く之に反し、一方陸上機關の發展と共に、他方運河の必要は、益々識者の注意を曳き、殊に經濟上活躍せる地方、又は此等地方の連絡として、又依て以て活躍せんとする地方等に於て然りとなす。是特に運輸上資金の低廉にして、運送力の甚大なる水路によりて、陸上機關の短所を補ひ、更に進んで、地方經濟の發展を期せんと欲する爲めにして、亦現代交通問題上顯著なる一趨勢といふべし。されば、數多の陸上交通機關を有するにもせよ、大都市は、競つて運河の開鑿を成し、又成さんせざるを以て、内地の都市も一方に於ては運河の港となり、市にして港たる水陸兩性の都市が、漸時多きを加へつゝあるを見るも偶然ならざるを知るべし。此故に、運河が工學上、經濟學上、或は外交上、政治上の一大問題たり得るを共に、我が地理學上より見るも、正に注目すべき一大問題ならずば

あらず。スエズ、パナマの如き世界的運河はいふまでもなく、國內運河の如き亦然りとなす。

此の小冊子は、運河と商業發達との關係を究めんとするが、主眼にして、先づ世界古今運河の大勢を述べ、ニューヨークの運河系につきて、運河の必要、運河發達の經過、ニューヨーク市と運河との關係、運河と鐵道との關係等を詳述し、現時の問題たるパナマ運河を始め、亞米利加の諸大運河を説き、轉じて、現今の運河問題世界航運の部門等に就きて概説したるものなり。本書の記述が亞米利加合衆國の事項に偏せるの傾あるは、同國が運河發達上世界に冠たる事は勿論なれど、又著者が同國人なる事も亦素因たるべし。其運河の人文に及ぼす影響に關して敘述せる所は、靴を隔て、痒きをかくの觀なきにあらざれど、之は理論よりは寧ろ實際的方面に重きを置ける本書に對する不當の遺憾にして、本書の特徵も亦此にあるを思はざるべからず。

運河問題に關しては英文のものにても必ずしも、參考書に乏しからず。又スエズ、パナマ兩運河の如き、或は支那の大運河の如きには、特殊の參考書も多けれど、廣く世界に亘つて、運河のみを取扱へるものとしては、未だ多く現はれず。此意味に於て、此小冊子は斯界の輕便なる資料として、座右に備ふべきの價值あるべし。〔内田〕

●Lunn Arnold: The Alps (*Home University*

Library) London 1914 ¥ 0.50

低廉廉價にして、學術の普及を目的とせる出版物が、陸續として英國に表はるゝは、外國語中英語を主とせる我國人より見ても喜ぶべき現象といはるべからず。就中、地理學、史學に關するもの數多を含むものには、廿五錢本の *People's Library* の如きあり、五十錢本の *Useful Library*, *The Nation's Library*, *The World Library*, 及び *Every Man's Library* 等の如きあり。本書の關する *Home University Library* の如きも、其一にこゝへ、亦優秀なる叢書たり。

Home University Library は尙縮刊中に屬せるが既刊のものを通覽するに史學地理學に關するもの甚だ多く、其主要なるものにて、史學關係のものに *French revolution*, *History of War and Peace*, *Medieval Europe*, *The Papacy and Modern Times* の如き、或は *History of Our Times*, *The Dawn of History*, *The History of England*, *Rome* 等の如きあり。又地理學に關するものは *Modern Geography*, *Polar Exploration*, *The Opening Up of Africa*, *The Animal World*, *The Evolution of Industry*, *Astronomy*, *Canada*, *Climate and Weather*, *Anthropology* 等あり、此に紹介せんとする本書の如きも即亦其一なり。著者は英人

としてアルプス山脈に對しては相當に造詣を有する人。本書は主としてアルプス登山の歴史を叙述せるものにして、中世に於けるアルプスに關する地理上の智識や、ハンニバルを筆頭として、古史に表はるゝアルプス横斷者に就きて略述したる後、其本論に入り、一七三九年エンゲレベルグの僧侶に先鞭を付けられたるアルプス登山が現時の隆盛を來すに至るまでの經過をば横述せるものなり。アルプスの高峯中最初に頂上を究められたるモンブラン登山には一七八六年ヂヤック・バルマートの登山談を述べ、モンテ・ローザに於けるベック・ビエトロ・チヨルダンを説き、かくてチロル地方に於けるグロス・グロツクナールや科學者ヒューヂを始めとして學者の學術的研究の進運を談り一八五四年ホーリスのエッダ・ホーン登山を始めとして、英人のアルプス登山者がアルプス各地に活動せし事より、最も險阻なるマツターホーンの先登競争と、ハンバーの冒險的先登談にアルプス諸高峯先登者の幕を閉じ、轉じて「文學上に表はれたるアルプス」を記載せり。平易なる文字にて興味ある事實を通俗的に記述せるものにして、獵師僧侶等の登山より始まりて好事家冒險家の先登競争の時に移り、かくて學術研究的登山の時期に達せし事及登山學會、俱樂部等迄本書によりて其梗概を窺ひ得べく、又登山の歴史發達の經過が我國のそれと

大に趣を同せるも興味ありといひつべし。アルプスは歐洲人士に離るべからざる關係あるを以て其登山の歴史に關する書籍も亦甚少なからずといへども、簡明にして通俗的に然も非學術的ならずして斯くの如く概説したるものは未だ會て之あらざるべし。我國に於ても、漸く山岳趣味の勃興し登山熱の旺盛ならんとするるとき一般好山家は勿論、中等教師の參考書として、亦銘夏の資料として推奨せんと欲するものなり。〔内田〕

● **Hollderness, T.W. ; Peoples and Problems of India (Home University Library) London N. o. 50**

住民を説くに、先づ其位地の自然地理的條件に著目すべきは、當然にして、著者も亦、印度住民の研究に就きては、カンヂェス河平野、及地文上氣候上の要件と、其政治史研究の要と梗概を述べ、(印度なる名稱は、最初は、インダス河を意味せしものが、後擴張せられて、インダス河及び其支流流域地方を意味するに至り遂に今日の如き廣大なる地域の名稱となりたりと) 歴史、民族、階級制度、宗教、經濟生活等を説明して、英國の印度政廳、及び土人の政治を説き、統治上の諸問題と、政治的及社會的活動とを知らしめんと努め居れり。統治上の問題としては、其一軍事上現行義務兵組織が、財政上多大の苦痛を感じしむるに雖ども、其兵員を減少する事の國防上不利なるを認め、印度の防禦上、尤も注

意すべきは、北西國境にして、パタン族、アフガニスタン、及び露西亞は、實に其假想危險の三要件となせり。其二民政上に於ては、工業及通商政策を第一とし、之に連關して、住民の都市集注の救済と衛生狀態の改善との最良の法策は、土人教育にありと斷じ、其他、司法事務改革の要を唱へ、更に此等改善に要する經費は、課税のみに頼らんとするは、不當にして宜く低利の英資公債に待つべしとなし、政治的及び社會的活動の章に於ては、印度人の個人生活を左右する社會、宗教及び政府の三方面に對する運動と著者の意見とを披露し、以て印度の内情の一斑を窺はしむ。

從來印度に關しては、地理學上の研究も大に進捗し、公私の報告著書は數に於ても、甚だ多く實に於ても、權威あるもの少からず然も小冊子によりて、人文上の觀念を得るに適するものに至つては、乃ち多く之あらす。本書の如きは、其欠陥を補充する一つと見る事を得べし。亦、中等教師の好資料たらん。〔内田〕

● **古版地誌解題 和田萬吉著**

近來郷土研究の顯著なる進運は、縣志郡志市町村志等の編輯出版を促し、他方には又古地誌類の刊行せらるゝありて、其裨益する所尙に史學、地理學の方面のみに止まらざるべし。然るに國書刊行會刊行本等に收めらるゝ地誌關係圖書、近くは歴史地理學會の刊行に係る大日本地誌大系又は京都叢書中の或者の如き、一見其

書名によりて、其内容の關係せる地方、及取扱はれたる方面等に對する概念を得ん事難きもの尠なからざるは、少しく此方面に注意せる人の均しく感ずる所なるべし。於是乎、吾人は和田萬吉氏の古版地誌の解題に對して、多大の期待を有するものなり。

此書收むる所は、發行者和田維四郎氏の「架藏地誌類中の古版及中古版に屬するもの數十種を主とし、之に加ふるに今後政府の價值あるもの及寫本にして版本と對照するに可なるもの數種を以てせるに止まり、古版中殊に稀覯珍奇に屬するもの若干を逸せり」と雖も、此等は他日の増補に待ち、今は姑く稿本の儘とせり。題して古版地誌解題と云ふ。書中寫本數部を交へたれど刊本の多きに緣りて姑く此く名づけたるなり」と、以て本書收録の大體を察すべし。

解題地誌の地方分布を見るに、全國及諸國一四、畿内二、山城二、二（内別本五）、大和七、河内一、和泉二、攝津一〇、東海道四、三河一、甲斐一、相模五（内別本二）、武藏一八（内別本二）、東山道一、近江一、但馬一、南海道一、紀伊二、計九十三（内別本九）にして、各個に就き、著者刊行者及其年處捕圖の有無及大さ、丁數及行字數等を記し、其内容を解説し又諸々、原本、挿繪、本文の寫真を入れて原本を偲ばしむ、本書に收めらるゝもの、中にても其名目によりて一見内容の連想を得ざるものは、一目玉鐙名所都

鳥、日本、鹿子、國華、萬葉記、德永種久紀行、京童、出來齋、京土産、京羽、二重、内裏羅、菟蓐泥赴、江戸鹿の子、紫の一本、通會集等少なからず。殊に本書の解題に待つ所多かるべし。（和田維四郎發行 價二、八〇）〔内田〕

● 雜誌

● 日本古代の追放刑論 文學博士 三浦 周行

（京都法學實雜誌第十一卷五號六號七號所載）

本刊の淵源は遠く上古の所謂千位置戸に存するも、我中古法及び其母法とせる唐律に存せず、唯多少これに類似せる移鄉を適用して追放を實行せるは、適々其我國有法にして支那法の影響を受けたるものにあらざるの證なり。武家時代となりても朝廷の追放刑に對する方針は中古に異ることなく移鄉の法文に拘束せられたるも幕府に至つては朝廷の法制に拘泥することなく、右大將家の例ととして、後の準據することとなり、貞永式目亦追放刑を採用せり而して式目に於いては、所領知行を原則とせる幕府御家人には追放刑に處せしめとなりし如し。室町幕府亦大體に於いて此式目及び追加の精神を繼受せしが、江戸時代に入るや、追放刑存廢の論盛んに起れり。

江戸時代の追放刑は刑法中の主要なる地位を占むるものにして、其刑法たる御定書第百三條に其種類を例舉せり。而も其種類の繁